千里国際学園　中等部・高等部

シリーズ「世界は千里でひとつになる　The World Comes Together in Senri」

第 10 回　新たな教育の可能性を求めて：無人島キャンプと授業の融合「現代文明を見つめなおす」

教員 / 理科　　田中 守

千里国際学園では高等部１年生を対象に『現代文明を見つめなおす』というタイトルの授業を開講しています。教室での授業とキャンプを組み合わせた授業で、初めての試みとして４年前にスタートしました。キャンプは黒潮に洗われる徳島県の無人島を舞台に、３月末の春休み中に実施しています。今回は、この授業の趣旨と生徒たちの様子をご紹介したいと思います。

無人島の生活

ボートに乗り込み、無人島に向かう 15 人の生徒たち。明るい笑い声の裏に不安と期待が入り混じった複雑な気持ちが見え隠れする。島の生活での唯一のルールは『協力していけない』ということだけ。これから４日間誰の力も借りずに、自分の力だけで生活しなければならないプレッシャーは、私たちが想像する以上に大きいようだ。最初の作業は今晩の寝床を確保すること。学校からは簡単なつくりの一人用テントを貸し出している。夕刻が迫り、夕食の支度を始めるが、そう簡単には火がつかない。あきらめて非常食として配ってあった１本のバナナをほおばり、悔しい想いを胸にテントに戻る者も少なくない。

早朝、明るくなり始めると、待ちわびたかのように生徒がひとり、ふたりと浜辺の林の中から波打ち際に出てくる。昨日作った「我が家」の居心地はあまりよくなかったのだろう。ほとんど眠れなかった者もいる。しばらく海を眺めてぼーっとしている者、流木を集める者。やがて煙の臭いに混じっておいしそうな匂いがただよう。早々に朝食を済ませくつろぐ生徒の横で、未だに火がおこせずに悪戦苦闘する生徒もいる。あきらめて寝転んでも３月の海は寒く北風も厳しい。待っていても何も食べ物が出てこない現実にようやく納得し、やがて我慢しきれず再び火をおこし始める。島に持ち込んだ食べ物は、わずかな非常食を除くと米などの基本食材のみ。潮が引く時間になると、ライフジャケットをはおり、それぞれ磯にでかけていく。獲物は貝やカニや海草が主だ。時には岩ガキやウニを見つけて歓声が上がる。浜大根は人気が高い。しかし生徒たちの採りすぎがたたり近年では絶滅の危機に瀕している。島での生活に慣れてくると、海水を煮詰めて塩を作る者、「我が家」の改修工事に燃える者、かまどに手を加えシステムキッチンのように作り上げる生徒もいた。浜辺に流れ着いた大量のごみは、ここでは宝の山だ。一番人気はイス。もし流れ着いたお風呂の腰掛を拾うことができたなら羨望の的になる。島には古井戸がひとつ、ちょうど裏山を越えた反対側の浜辺にある。片道 30 分の道のりだ。いくらでも使っていいが、自分で運ばなくてはならない。自然と彼らは節水し、中には雨水を貯めようとする者まで現れてくる。決められたプログラムはなく、何時に起きて何をすると言った決まり事はいっさいない。時計は持ち込み禁止リストの一番目に載っている物だ。時間を考える必要はないはずだが、とても気になるようだ。太陽と月の位置で時刻を考え始める。時間には縛られない無人島生活も自然のリズムには縛られる。よく考えて夕食の準備を始めないと、暗闇のなか手探りで調理をする破目になる。懐中電灯も持ち込み禁止リストに載せている。調理に使う薪として流木や林の枯れ木を拾い集めなければならないが、雨があたって濡らしてしまったら火がつかない。テントの屋根も心配だ。天気の変化が自然と気になってくる。おなかがいっぱいになり、余裕ができてくると、消し炭で石に絵を描く者も現れてくる。それを見ていたある生徒の一言。「文化の誕生だ！」

最後の夜

３泊４日の無人島生活を終えても、あえて帰宅せず、対岸にある海洋センターで宿泊している。同じ経験をしてきた仲間たちと一晩を過ごすことが大切であると考えているからだ。お風呂に入り、暖房の効いた部屋でボリュームたっぷりの夕食を食べる。デザートのプリンに感動している生徒もいる。久しぶりで味わう便利で快適な文明だ。返却された携帯のメールチェックに没頭する者も少なくない。夕食後は４日間を振り返るディスカッションと最終レポートの作成が待っている。このディスカッションの中でそれぞれがどんな気持ちで４日間を過ごしていたのかを確認しあい、深めていく。１日は食べることに始まり食べることに終わる。「生きるとは食べること」そんな感想が自然と出てくるのはこのときだ。彼らは現代の文明社会と自分との距離感を実感し、どのように接していくべきなのかを悟り文明の本質を理解していく。

講義の持つ意義

４年前に新設したこの授業は、本校で冬学期と呼ぶ 12 月から３月までの３ヶ月間に週２時間の講義を行った後、春休みを利用した５日間のフィールドワークを実施する、２単位の総合科目で、国語科、体育科、理科の教員が担当している。

国語の授業は『孤島の冒険』（N・ヴヌーコフ著、童心社）を題材に進められる。ロシアで実際に無人島に流された 14 歳の少年が、救出されるまでを描いた小説だ。この中で少年は浜にうち寄せられたゴミを拾い様々な生活用具を確保し、たくましく生きていく。この授業で利用している無人島にも大量のゴミがうち寄せられる。普通に見れば汚らしく気が滅入る光景だが、この本を読むと、ゴミの山が宝の山に見えてくる。

体育科の教員が担当する授業は、健康の維持に関することを取り上げる。水分や栄養、体温の保持など学ぶことは多い。

そして私は理科を担当しているが、その内容は気象学（風の変化と天気）、海洋学（海流、干満、波）、化学（燃焼）、天文学（天体の運動、月と太陽）などである。どれもフィールドワークでの生活につながりそうではあるが、そのまま使える知識とはならないものを極力選んでいる。たとえば化学では、燃焼を取り上げ、物が燃えるとはどういうことなのかを考えさせる。決して実際的な薪のくべ方は教えない。授業で示すのは木材の燃焼が続くための条件は、燃える物と酸素と木材の着火点である 260℃以上の温度であること。いかに熱を逃さず十分な空気を供給できるようにかまどを作り、木を置いていくか。失敗を繰り返しながら生徒たちは科学的知識と実際とを結びつけていく体験をする。どのように物は燃え、天気は変化していくのか。無人島の生活のなかで困りはて、何とかしなければならない状況に追い込まれたとき、生徒たちはごく自然に、これらの知識や過去に学んだことを手がかりに、考え行動を始める。それは教室で習ってきた知識が、初めて知恵となる瞬間である。成績のために勉強するのでなく、学ぶことそのものが目的となることを理解し、やがて文明が知恵の集積であることを実感していくことになる。